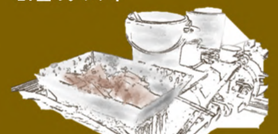
陶器と共に暮らす *Factory*

～ 陶 器 を 学 ぶ 学 生 × 観 光 客 × 職 人 の 伝 統 継 承 ～

1. 土のブレンド



用途に合わせて適切な比率の土をブレンドし混ぜ合わせながら粘土内の空気を抜く。空気を抜くことでヒビや割れを防止する。土の種類によって焼成温度が異なる。

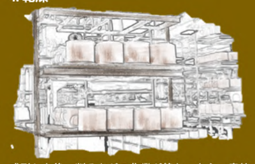
2. 土練り

固さ、水分が十分に均一になった土を、少しずつ回転させながら菊のような形に練る。回転させるのは、中の空気を抜くためである。

3. 成形（せいけい）

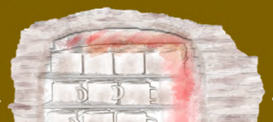
美濃焼は主にろくろ、手ひねり、またはタタラ成型で作られる。原型から使用型まで多種多様な型を使用して、量産する。指先の小さな動きが形を決める。

4. 乾燥



成形した後、削るなどの作業が終わったら、素焼きを行う前にゆっくり乾燥させる。それぞれ適正な時間をかけて充分な乾燥が必要となる。

5. 素焼き（800℃）



素焼きは原料の土の水分をとばし、可燃物を燃やして強度を上げる工程。700度～800度の温度で時間をかけて焼成を行う。素焼きによって釉薬がかけやすくなる。

6. 下絵付け

下絵付けは施釉（せゆう）の前に行う工程で、釉薬の下に絵を描くこと。乾燥させた生地を素焼きしたものに好きな色の顔料を使って絵付用の筆で描いていく。

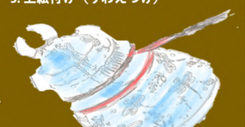
7. 施釉（せゆう）

素焼きした作品に釉薬をかけることを施釉という。釉薬は焼くと溶けて、膜を作るため、透水性がなくなり硬度が増す。作品を装飾する役割をする。

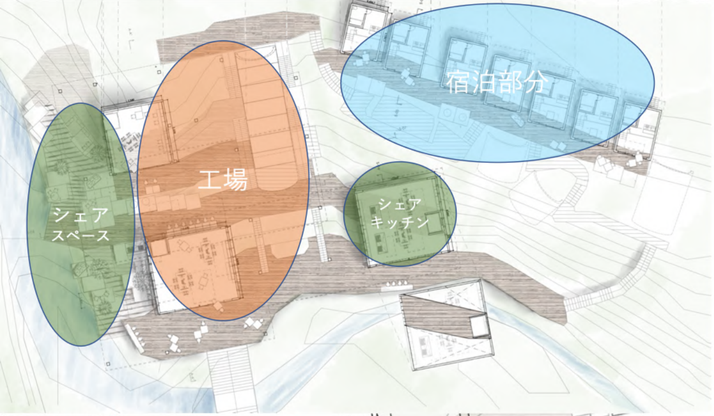
8. 本焼（ほんやき）

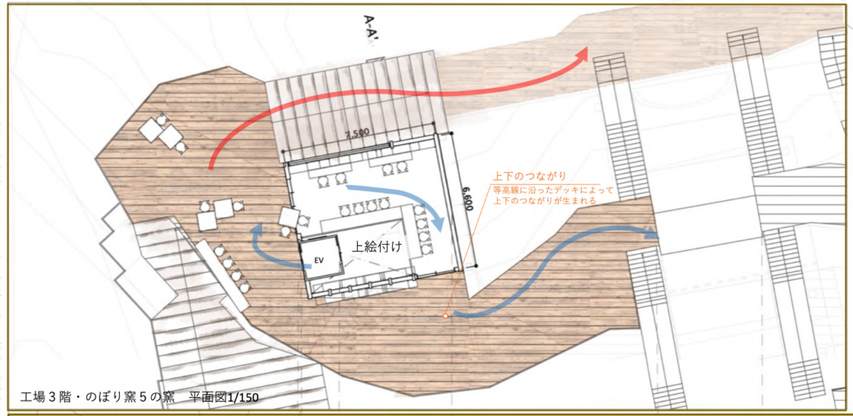
施釉後に高温で行う焼成が、本焼である。窯詰めは丁寧に行い、窯全体が均一の密度になるように慎重に置いていき焼きあげる人手のいる作業である。

9. 上絵付け（うわえつけ）

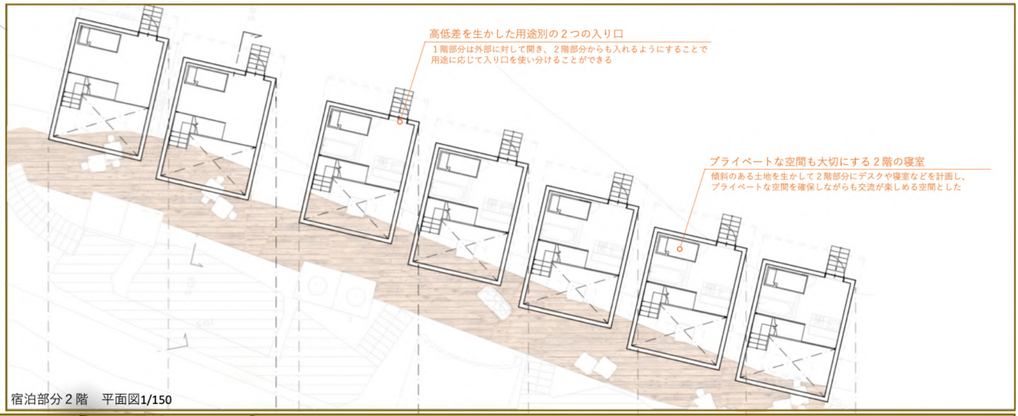


上絵用の絵の具を用いて絵や文様を施すこと。繊細な線を書き込んだ後、色が飛ばないよう本焼よりも低い700～800度で焼成を行う。



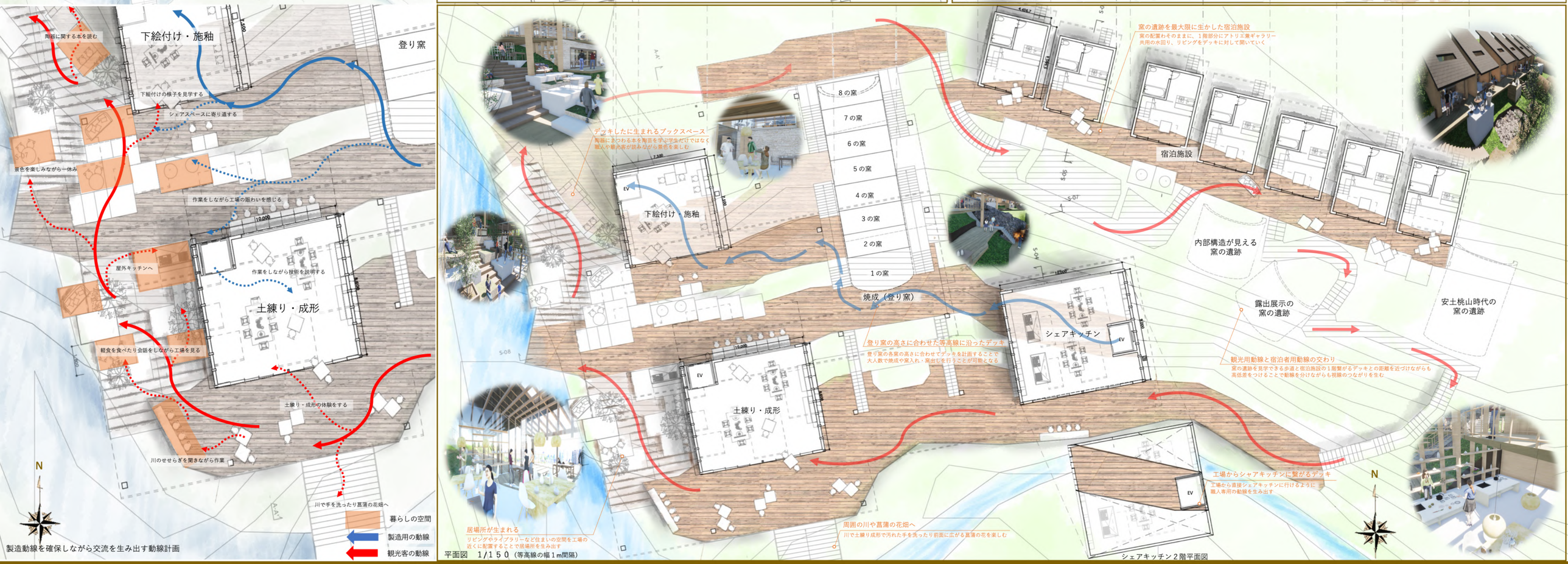


工場３階・のぼり窯５の窯　平面図1/150



宿泊部分２階　平面図1/150

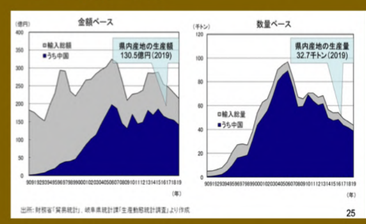
製造動線を確保しながら交流を生み出す動線計画

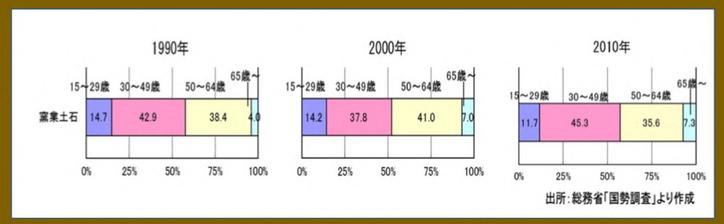


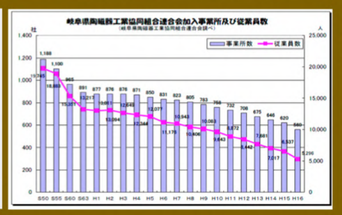
平面図　1/150（等高線の幅１m間隔）

シェアキッチン２階平面図

1. 背景・目的







陶磁器産業は町の暮らしを支え、時代が変化する中でも伝統的な技法を生みながら継承がされてきました。しかし、近年海外からの低価格品の大量流入などによって出荷数や従業員数はピーク時の１／３となっています。また経営者・職人の高齢化や後継者不足も起きている状態です。取材をした中でも家族経営が主流となった閉鎖的な工場となっており、この伝統を守り続けていくのはとても困難であると感じました。街中では陶器が安売りされています。特に美濃焼は1200年から1800年まで瀬戸物として一括りにされておりブランド力が弱いとされています。知名度は低くても他の場所では採掘できない低温でも焼くことができる土（低温でも焼くことができると焼成時に必要となる木材などの燃料が少なくて済むため安く大きな作品がつくれる）や工業化の中でも衰えなかった繊細な技術、窯などが現在でも継承されています。そこで本計画では陶器と共に暮らし、人との交流を生み出し、その中で陶器の伝統を継承していきます。対象敷地は岐阜県土岐市。ここは全国シェアNo.1の美濃焼の生産地です。安土桃山～江戸時代にかけて実際に陶器が焼かれていた織部の里公園に計画します。織部の里公園には今でも窯の遺跡や出土したかつて焼かれていた陶器が展示されているだけではなく、斜面を下ると菖蒲の花畑が広がり前面には川が流れている歴史を感じることができる自然豊かな公園です。歴史を感じられる自然豊かで過ごしやすい場所ですが休日でも観光客の姿は少なく閑散としている印象を受けました。そこで賑わいを取り戻すためにもその中でも窯に隣接し、斜面や窯の遺跡を最大限に生かすことができるこの場所を対象敷地としました。

2. 敷地概要

岐阜県土岐市

全国シェアＮｏ．１の美濃焼の生産地

岐阜県の南東に位置し豊かな自然と恵水源にまれた土岐市はるか古墳時代からやきもの文化が栄える町

かつて（安土桃山～江戸時代）の窯や作業場の分布

現在の織部の里公園

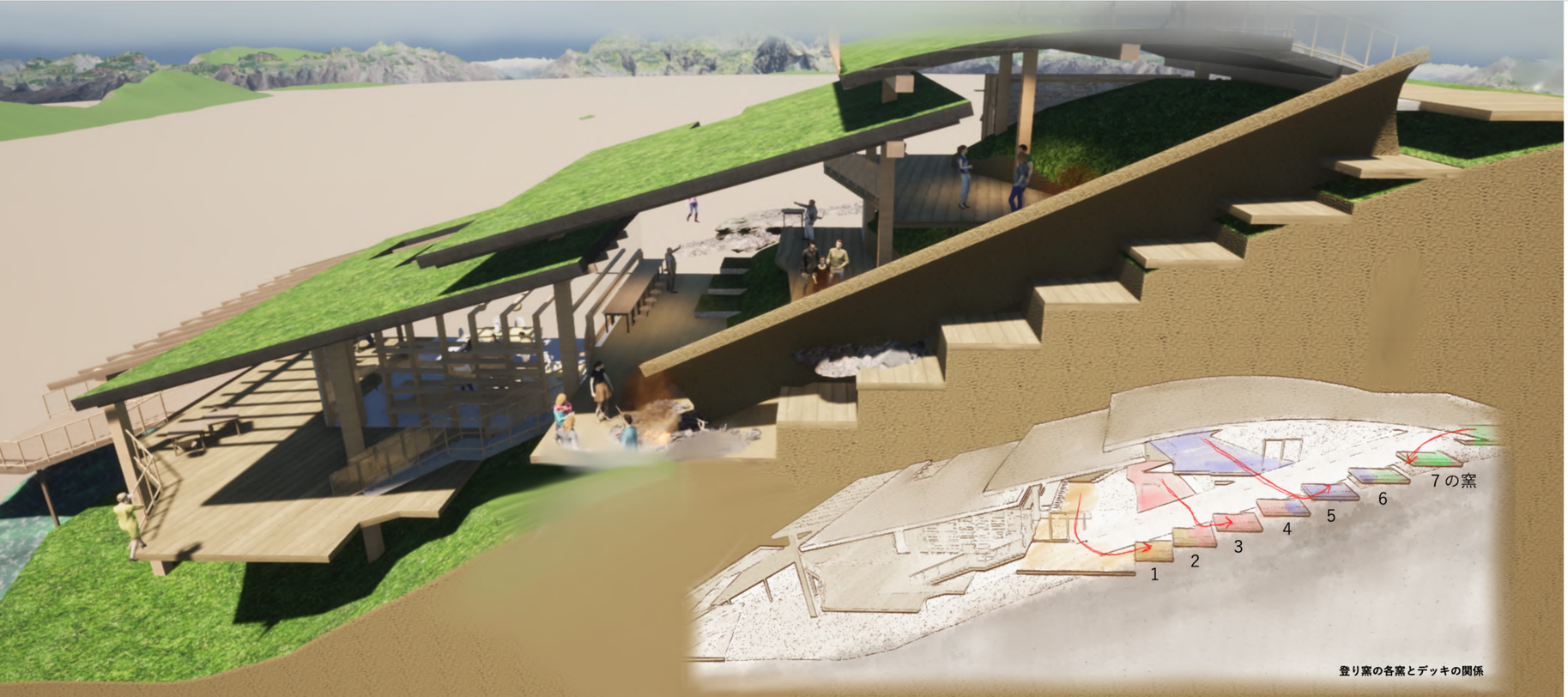
元屋敷窯の１番下から南を見た写真

対象敷地の南側に広がる花ショウブの畑

南西から見た写真

かつての作業場

窯の１番下から見上げた写真

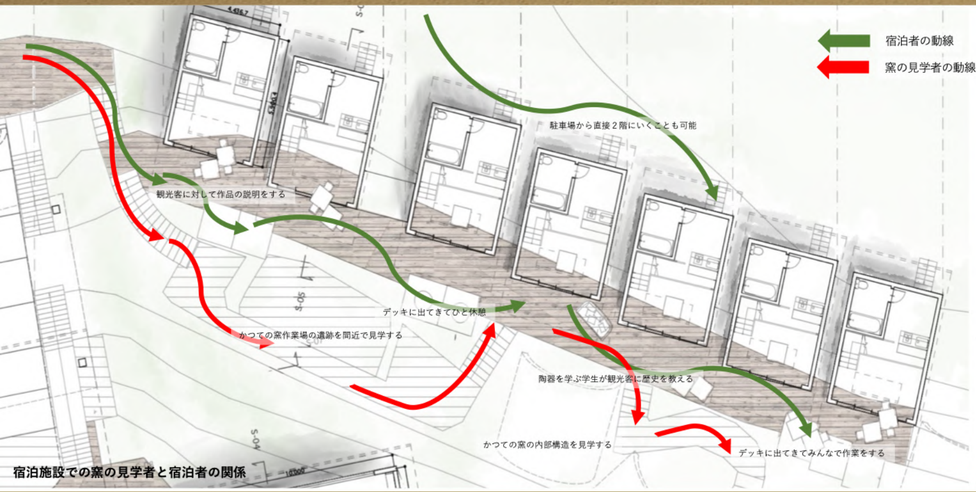


登り窯の各窯とデッキの関係

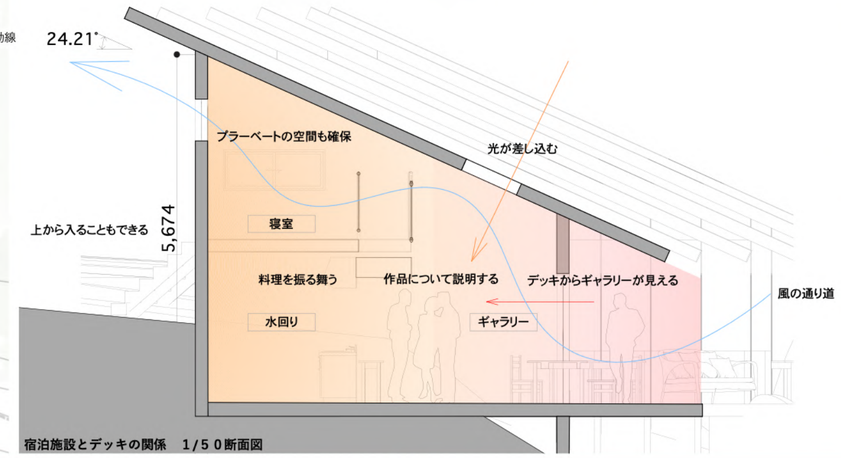
昔の登り窯：大人数の職人がみんなで作業する　現在の登り窯：家族経営で登り窯を維持することが難しい　新しい登り窯の継承方法：登り窯の各窯の高さに合わせて等高線に沿ってデッキを計画→観光客、職人、学生が協力して窯づめや、焼成を一緒に行う→文化の継承をしていく

焼成時には多くの人手が必要となるため登り窯の各窯の高さに合わせたデッキを設けることでみんなで焼成を行いながら職人の技を学ぶことができる

下絵付けの空間から見下ろすことのできるようにしたため作業をしながら窯の焼成や土練り・成形をする観光客や学生の賑わいを感じることができる



宿泊施設での窯の見学者と宿泊者の関係



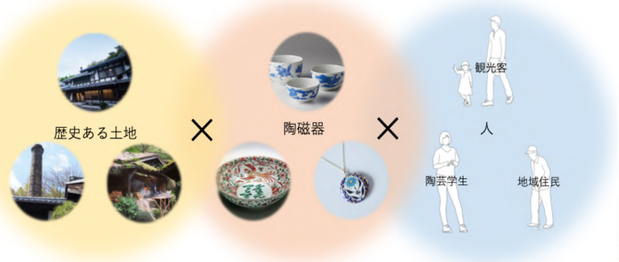
宿泊施設とデッキの関係　1/５０断面図

窯の遺跡やかつての作業場はそのまま生かし、歴史を感じることができる宿泊施設は１階部分をデッキに対して開いていくことで交流が生まれていく

3. コンセプト

陶器と共に暮らす

製作工程を見せる場（工場）　**陶芸学生用の集合住宅**　その他にも…アトリエ　シェアキッチン　宿泊　体験教室等



用途

製造工程を見せる場（陶器工場）　×　**宿泊施設**

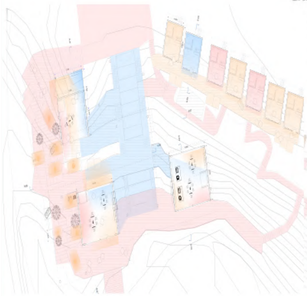
アトリエ・ギャラリー　シェアキッチン　観光客用宿　体験教室等を含む

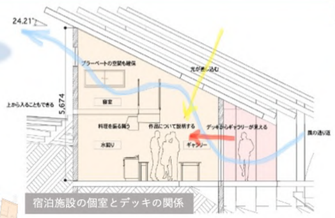
コンセプトは陶器と共に暮らすです。歴史ある土地と陶磁器、観光客や陶芸学生、職人とが関わりあい、文化を継承していきます。メインの用途は陶器工場と陶芸学生や観光客用の宿泊施設です。そのほかにも集いの場としてシェアキッチンや体験教室などを計画していきます。工場に隣接して宿泊施設のシェアスペースとなるリビングの空間やキッチン、デスクスペースなどを配置します。そして建築全体で賑わいを生み出しその中で職人と陶芸を学ぶ学生、観光客との交流を生み出していき文化の継承がされていきます。

4. 設計概要

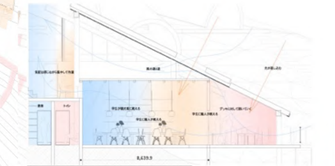
観光客　陶芸学生　職人

それぞれの居場所を平面図で色分けした図



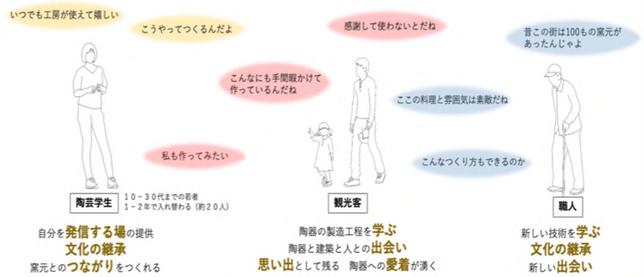


宿泊施設の個室とデッキの関係

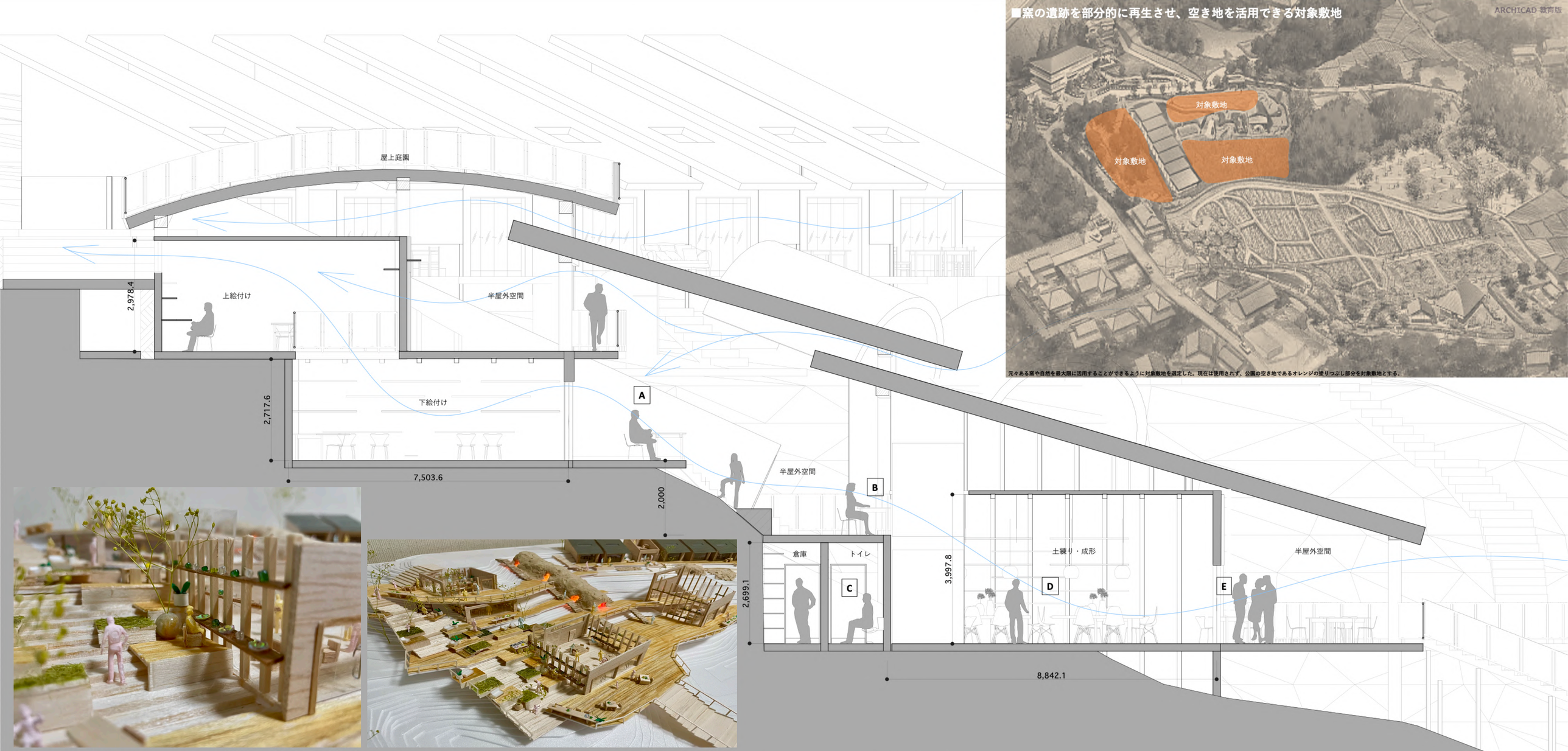


工場（土練り・成形）とデッキの関係

■ヒトからヒトへの文化の継承



陶芸学生、観光客、地元の人が集う場となります。お互いに刺激を受け合い、新たな出会いや文化の継承がされていきます。陶芸学生、観光客、職人の居場所の関係を色で分けた図です。等高線に沿ったデッキに対して空間を開いていくことで交流が生まれていきます。具体的には学生が観光客に説明したり、職人が学生にアドバイスをするなどして交流が生まれます。私は実際に直接製作者から聞くことで、一つ一つの工程の大切さを感じ、陶器の見方が変化していきました。同じ体験をこの場所を訪れる人たちにも感じていただきたいです。



元々ある窯や自然を最大限に活用することができるように対象敷地を選定した。現在は使用されず、公園の空き地であるオレンジの塗りつぶし部分を対象敷地とする。

南北1/50断面図

0 1 2 3 4 5m

A 傾斜を利用する
登り窯に沿って製造工程を分解することでフラットに各窯に床がつながり大人数で効率的に窯に作品を詰めることができる。傾斜によって生まれる視線の高さの違いによって外の賑わいや景色を楽しみながらも細かな作業ができる。

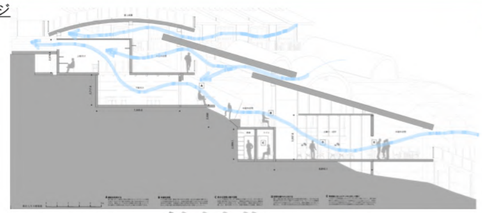
B 半屋外空間
小さな箱の空間（製造工程で分けた空間）を大きな屋根で繋げることで半屋外空間が生まれる。半屋外空間は廊下でありながらも休憩、見学をする場所、作業場など様々な用途で利用できる。窯の形状を生かした風の通り道が開放的な気持ちの良い空間へとしていく。

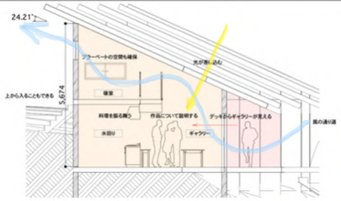
C 見せる空間と隠す空間
トイレや道具などをしまう倉庫は土を掘りつくる。ガラス張りの空間に壁を隔てるのではなく、開放的な空間はそのままに機能性も兼ねそろえた空間とした。見せる空間＝（製造工程を見せる工場）など　隠す空間＝トイレ、空調や配線などの設備、倉庫など

D 空間を緩やかに分ける
職人と観光客の間に陶芸学生の作業空間を計画し、それぞれの空間は壁で仕切らずひと繋がりの空間とする。ちょうどいい距離感は保ちながら作業をすることができる。境界は曖昧となり互いに教え合い、その間で交流が生まれながら伝統が継承されていく。

E 等高線に沿ったデッキに対して開く
小さなハコは等高線に沿ったデッキに対して開いていく。開口部を開けたり閉めたりすることで空間を広くしたり狭くしたり、外部とのつながりに可変性をもたらす。デッキは廊下でありながらもみんなの共用空間やそれぞれの居場所など自由な空間として使われる。

風と視線通り抜けイメージ

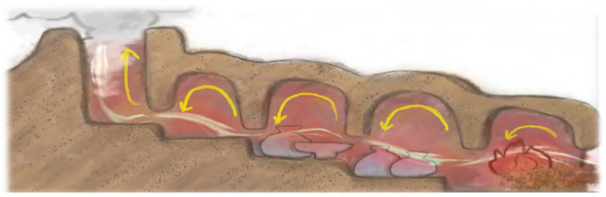




アトリエやギャラリーはガラス張りで**外に開き**ながら
斜面を生かし、**メゾネットタイプ**にする事で
寝室などの**プライベートな空間**をつくりだした。
上下に窓を設けることで**風の流れ**を生む

■窯の形状を利用した風の通り道

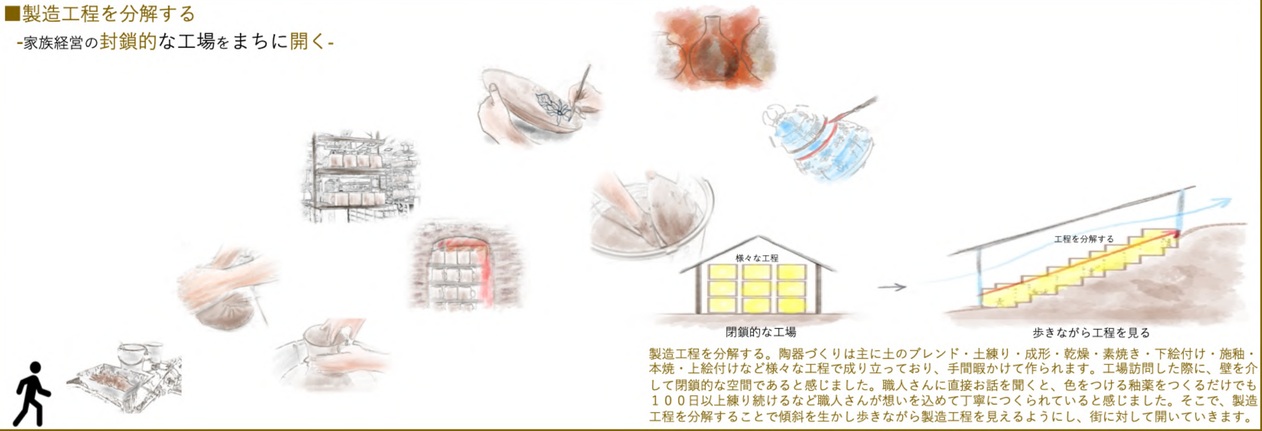
高低差を利用



窯の形状を利用した風の通り道。斜面に沿って風を通す窯の特徴を生かしたファサードが特徴的です。上部の図面は工場全体の断面図です。工場や半屋外空間を風が通り抜けていく開放的な空間です。陶芸学生の宿泊部の１階はギャラリー兼アトリエとして利用することができる。デッキに対してギャラリーを開いていくことで外部とのつながりを生み出します。２階部分はプライベート性の高い寝室などの空間を配置し、高低差を利用することで風や視線を通し、交流をしながらもプライバシーが保たれるようにしました。

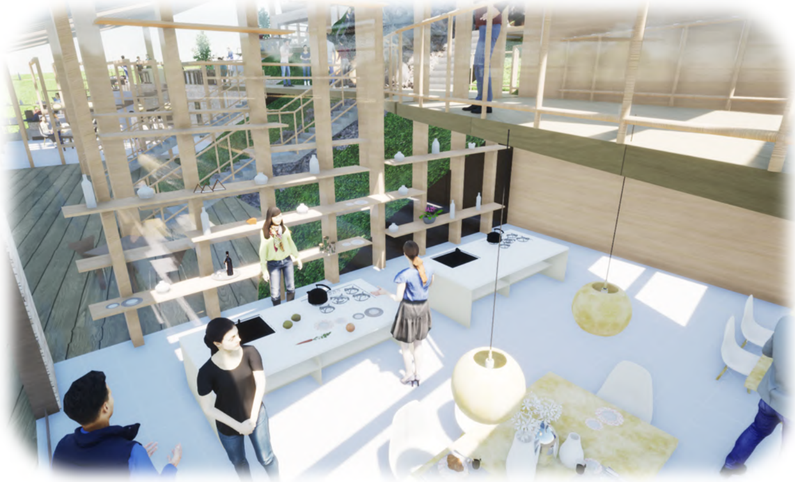
■製造工程を分解する

-家族経営の封鎖的な工場をまちに開く-

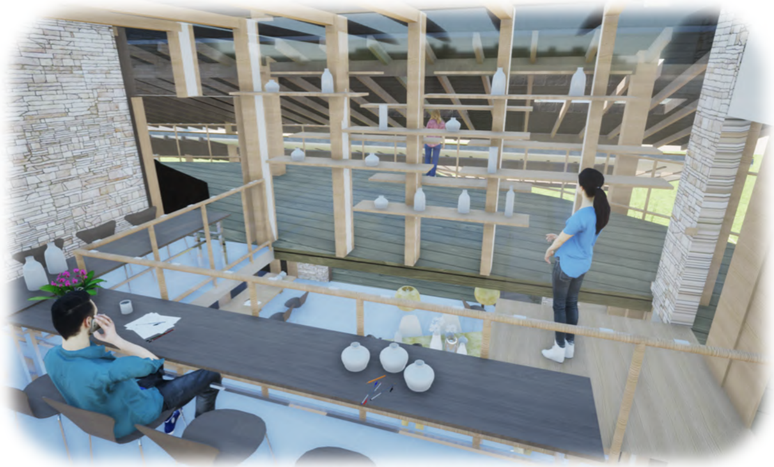


製造工程を分解する。陶器づくりは主に土のブレンド・土練り・成形・乾燥・素焼き・下絵付け・施釉・本焼・上絵付けなど様々な工程で成り立っており、手間暇かけて作られます。工場訪問した際に、壁を介して閉鎖的な空間であると感じました。職人さんに直接お話を聞くと、色をつける釉薬をつくるだけでも１００日以上練り続けるなど職人さんが想いを込めて丁寧につくられていると感じました。そこで、製造工程を分解することで傾斜を生かし歩きながら製造工程を見えるようにし、街に対して開いていきます。

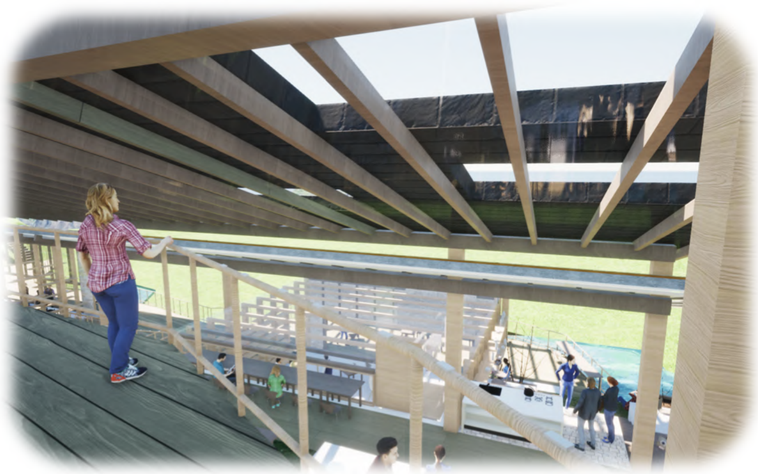
下絵付けの空間から上絵付けの空間へと繋がる吹抜



シェアキッチンから工場に繋がるデッキの通路



上絵付けの空間から下絵付けの空間へと繋がる吹抜



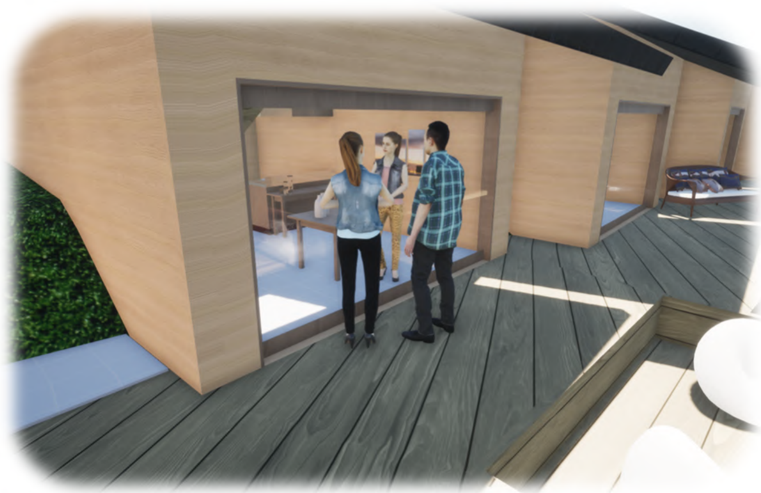
上絵付けの空間に繋がるデッキから見下ろして下の様子を感じる

土練り・成形のスペース横のシェアスペース

デッキに対して１階を開いていく宿泊施設と窯の遺跡

デッキ下に生まれるブックスペースとデッキで繋がるそれぞれの空間

交流を大切にしたデッキに対して開いていく土練り・成形の空間



宿泊施設の１階をデッキに対して開いていくことで交流を生む